



TITLE:

ヘーシオドスの星 : 希臘詩「仕事と
月日」抄譯」

AUTHOR(S):

野尻, 抱影

CITATION:

野尻, 抱影. ヘーシオドスの星 : 希臘詩「仕事と月日」抄譯」. 天界
1939, 19(217): 202-209

ISSUE DATE:

1939-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167808>

RIGHT:

へーシオドスの星

——希臘詩「仕事と月日」抄譯——

野 尻 抱 影

アトラスの女ら⁽¹⁾ブレイアデス昇りつゝあらば、收穫をはじめよ。⁽²⁾ 洗
まむとする頃は耕作をはじめよ。 四十の夜と晝、彼女らは隠れ、年
めぐるにつれ、またも現はる。 その時はまづ鎌をとぐべし。 これ
野の掟なり。 また海近くに住まへる者ら、とゞろく海よりも遠き豊
かなる村里、谷あひ、山のかひに住まへる者らの掟なり。 もしデー
メーテールの果實^{このみ}を季節^{とき}をたがへず摘まむと思ひ、四時^{いじ}それぞれの實
りを收めむ爲めには、肌ぬぎて播き、肌ぬぎて耕やし、肌ぬぎて刈る
べきなり。(383—93)

(1) 當時(西紀前約八世紀) この星團は五月初めに昇れり。(2) 十一月。

日輪の鋭き力といきるゝ熱おとろへ、全能のズエウス神⁽¹⁾、秋の雨を送
り給ひて、人々の肌いとも凌ぎよき時、——そはこの時⁽²⁾セイリオスの
光生まれ貧しき人々の頭^{かうべ}の上を、晝はちとのひまのみ過ぎり、大かた
は夜のまにかかればなり、——やがて木の葉^{つば}地に雨ふり、芽ぶきのと
ゞまる時は、斧もて伐る木々に蟲つくこと、ひともし。この時を忘
れず木を伐るべし。このわざの季節なればなり。(415—23)

(1) 十月。(2) シリウスのこゑ。

ズエウス神、冬至の後六十の冬の日を終り給はゞ、アルクトウーロス⁽¹⁾、
聖なるオーケアノスの流れをはなれ、黄昏^{たそがれ}まづ輝きのぼるべし。 彼
れにつぎて、金切り聲に泣くパンデオンの女つばくらめ、春はじまる
頃しも人にまみゆべし。 彼女來らざる先に、葡萄の枝をとくなふべ
し。 そのいとよき時なればなり。 されど家⁽²⁾を負へるもの、ブレア

デスをのがれて地より葡萄の樹にのぼらば、早や葡萄畠を堀りおこす季節にあらず。鎌をとぎ、^{やつこ}奴隷どもを目ざますべきなり。(564—76)

(1) ヘシオドに始めて出づ(ホメロスにては、ポオテス)。この星當時は二月より三月の黄昏に昇れり。(2) 蝸牛のこゝ。季節は五半月ばを示せり。

されど、*スコリュモスの花咲き、^{きりぎりす}蟋蟀木にとまり鳴きて、^{はね}翼の下より鋭き歌をたえず降りそいぐ、たゆめき暑熱の候ともなれば、山羊は肥え、酒は味きはめてよろし、女たちはいとみだらなれど、男たちはいと力なし。これセイリオス、^{かうべ}頭と膝とを焦き、肌は暑さのため乾からべばなり。されど、その時は木蔭の岩をもとめて、ビブリスの酒と凝乳と、山羊の^ち乳を飲み、また森に飼ひて仔を生みしことなき牝牛と、山羊の幼仔の肉を喰ふべし。(582—93)

* アティチョイク(きくいも)のこゝ、六月花咲けり。

* 強きオアリオン初めて現はるゝ時、^{やつこ}奴隷らに、野天なる平たき麥こき場にて、デーメテールの型なる小麥を^ひ簸らしめ、つぎてそれを量り、^{かめ}甕に貯ふべし。(597—99)

* オリオンの希臘名。當時は七月初めて昇れり。

されど、オアリオンとセイリオス^{なかみら}中空に來り、⁽¹⁾ばら色の黎明にアルクトウーロスを見なば、ベールセスよ、葡萄の房をみな^き剪りて、運び歸るべし。^ひ陽にさらすこと十日十夜、つぎて上を蔽ふこと六日目に、⁽²⁾デュオニューソスのこの樂しき贈物を器にしぼり入るべし。されど、⁽²⁾ブレイアデス、ヒュアデス、強きオアリオン沈みはじめなば、時をうつさず鋤とることを忘れまじ。かくして、果てたる年はたゞしく大地の下に移りゆくなり。(609—17)

(1) 九月の頃。(2) 以下十月末をいへり。

〔202頁へ續く〕

かく考へて來れば東亞及日本の天文學的^{てんもんがく}位置が經度上、緯度上如何に重要であり、如何に恵まれてゐるか判ると思ふ。東亞天文協會の使命も亦大なりと云ふ可きである。今や舉國聖戰の折柄天文臺新設の時機ではないかもしれないが、世人の考へる程莫大な費用を要するものでもなく、世界一流の天文臺さへ100萬弗もあれば十分で、リックの設立費でも70萬弗であつた。ウィルソン天文臺も創立以來今に至るまで1,000萬弗を消費してゐない。嘗て滿鐵が大天文臺設立を計畫し、精々500萬圓位で出来たものを中絶したのは残念であつた。必ずや近き將來にかうした天文臺が續々設立されて然る可しと思ふ。

吾人は更に日本の天文學界の現状を正しく知らねばならぬ。獨自の分野を持たず外國からのみ材料を得てゐる日本天文學者は他方日本語論文許り發表してインターナショナルに目覺めぬ缺點も持つのである。殊に日支事變の後、日本人全體が國際的に疑はれ恐れられてゐる爲めが天文學的材料も日本だけは封鎖せられてゐる状況にある。この點深く内省を要すると思ふ。

吾人の當面に爲し得る問題は色々ある。プラネタリウムを北京に作る事も一つである。古來敬天思想に養はれて來た支那人は想像以上に強く考へると思ふ。日支親善に役立つ事は云ふまでもない。東亞天文協會としては死滅望遠鏡の活用法もあらうし、日々の新聞に天氣圖と同様、黑點の圖を載せるのも一般民衆に豫期しない興味を湧かせる事ともなう。

要は人間の問題、人間の意志、意氣、使命觀の問題である。グラスゴウのベツカイ氏は“一冬に48時間しか星が見えず”と云ひ乍ら而も倦まざる眞摯な努力をつゞけてゐるではないか。

〔209頁より續く〕

* プレイアデス、オアリオリンの^か曇き力をのがれむと、霧立つ海にとび入る時は、もろもろの嵐かまへて荒るゝ時たり。さあらば早や、沸きたつ海に船をとゞめず、わが言ふごとく、陸を^か耕やすことを思ひ出づべし。船は陸に引きあげ、しめれる風の吹きあてざるやう。めぐりを隙なく石もて固み、空よりの雨に濡れざるやう船ぞこの桥を抜くべし。(619—23)

* 十月末又は十一月初めを言へり。